

## 主 題：幸福に降服する7

## 聖書箇所：マタイの福音書 5章8節

大阪にある大学が一つのアンケート調査を行ないました。日本人4000人以上の20-65才の男女に対して行なったアンケート調査です。彼らにいろいろな質問をして、それらを通して0点から10点までの評価をしてくださいというものでした。その内容は彼らがどれほど幸せであるのかどうかというものです。その結果は非常に興味深いものでした。5点をつけた人は1009人で約25%、7点が20%、8点は18%、10点の非常に幸福というのも232人で全体の5.5%を占めたと言います。グラフは全体に左に偏り幸福な人が多い、4点以下は約13%に過ぎない、非常に不幸はわずか14人だったと報告されています。そして、全体の平均点は6.32点、男性より女性の方が幸せでした。男性の平均は6.27、女性は6.51です。だからどうなのか？何とも言えませんが、この結果から見ると、日本人は一般的に比較的幸せなのかなと見てとることができる、そんなアンケートの結果でした。これを見ながら幾つかのことを考えました。皆さんは、今この瞬間、幸福ですか？と聞かれたら何点を付けますか？私たちはこの4000人以上の男女と似たような答えをするのでしょうか？どうでしょう？出席カードの裏にその点数を書いて出していただき、来週その結果を発表するとして、この浜寺聖書教会の幸福感の平均点は果たして何点でしょう？興味あるところです。

もう一つ、いったい私たちは何をもちて幸せを感じるのかです。幸せなのは、今朝目覚めがよかったから、朝起きて家族と言い争うことがなかったから、欲しいと思っているものを手に入れたから、他の人と比べて私の方が幸せだからと。何をもちて幸せと言えるのでしょうか？また、皆さんは何をもちて私は不幸だと言いますか？至福の教えの中でイエスは、神の前においてどのような人物が幸いであるのかということをお話されています。八つの宣言がありました。「幸いなるかな、…」と、この八つの宣言の中でイエスは、人が神の御国に属しているなら、その人は幸いであるということをお断言されました。そのことを宣告されたのです。ですからもし、今朝、ここにおられる皆さんが神の恵みによって救われ、神の御国に入ることが赦され、その御国を相続する者となっているなら、皆さんは幸福をもちた者であるとイエスは言われるのです。もし、皆さんが私の国籍は天にあるとパウロといっしょにそのことばを口にすれば、皆さんが幸福度につける点数は10点です。なぜなら、イエスが「あなたは幸せだ」と言われるからです。もし、皆さんがすべての瞬間に10点をつけることができないなら、どうしてそうなのか、考えたことがありますか？自信をもちて言い切れませんか？私はいつも10点をつけます！と。このメッセージを準備するに当たって私はずいぶん考えました。さすがに0点をつけることはないと思います。でも、5点のときがあるかもしれないと正直思いました。そのように思ってしまうこと、感じることも、なぜでしょう？なぜいつも10点ではないのでしょうか？いろいろな理由を上げることができそうですが、そのうちの一つは、私たちが天国に属する者の特徴をしっかりと反映して生きていないときに、私たちはその幸福というものをまるでもっていないかのように感じ、また、そのように生きてしまうのです。この至福の教えには、なぜ、私たちが祝福を受けているのかということと、そのような祝福を受けている者たちがもっている特徴が記されています。別の言い方をすれば、幸いを得ているその原因は、イエスがここで説明する特徴を生み出すべきものであるわけです。そこには直接的な関連があります。そして、もし私たちがその特徴を身につけていないとするなら、そのような生き方をしていないとするなら、よく考えないといけません。私は本当に天国民なのかどうかと。

今朝、皆さんといっしょにイエスが語られた至福の教え、そのことを続けて見て行きたいと思います。私たちが目的とすること、それは私たちが、正しく天国に属している本当に幸福な人物がどんな人物なのかを知ることです。どんな特徴をもちている人が幸いな人なのでしょう？そして、イエスは皆さんは天国に属するから幸いだと言われます。それなら、私たちはそのような生き方をしているかどうか、そんな特徴をもちているかどうかを考えなければいけません。もし、もっていないとするなら、私たちはよく自分のことを吟味しなければいけません。まず、本当に天の御国に属しているのかを考えなければいけません。また、同時に、そのことが確かであるとするなら、私たちはこのような特徴をもちて歩んで行くことができるように神に助けを求めなければいけないし、そういう歩みをしない自らを悔い改めないといけません。もし、私たちがそのような特徴をもちているなら、私たちはそれゆえに大いに神を誉めた称えることができるのです。

## ☆幸いである人の特徴 5：8

イエスの至福の教え、イエスはこのように言われます。「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るから

です。」、これが第6番目の「幸いなかな」という宣言です。イエスがこの至福の教えをされたのは山上の説教の冒頭でした。山上の説教を語るいわばイントロ部分としてこの至福の教えをされるのです。このことばはある意味非常にショッキングなものでした。なぜなら、人々は「幸いである」ということがどういう時なのかを考えると、イエスが語られるようなことが幸いだとは思わなかったからです。私たちはこれまでに五つの事柄を見て来ました。(1) 霊的貧困＝私は神の前にあって圧倒的に貧しい者である、何一つ誇ることができない、何一つ神に与えることができない、愚かで貧しい者であることを知っているということでした。(2) 悲しみ嘆いている＝そのような霊的貧困をもたらしたのは自らの罪であることをこの人はよく分かっていました。そのような罪の中にあることを知っている人物は、自分の罪を見て、自分の愚かさに、自分の足りなさに嘆き悲しむのです。(3) 謙遜ゆえの柔和さ＝そのような霊的貧困をもち、罪を悲しんでいるゆえに私には何一つ誇るところがないということを理解したへりくだった人物でした。このへりくだりは人々に対して優しく接するというその態度に具体的に現われることが柔和な者ということばで表わされていました。(4) 義に飢え渴いている＝霊的貧困をもたらしたのは罪であるから、それゆえ、自分は神の前に正しくないと分かった人物は、でも、神に喜ばれたいと願うのです。だから、神の義を求めます。それが何よりも欲しいと。だから、その人は義に飢え渴いているのです。(5) あわれみ深い＝苦しみの中に、困難の中にある人たちを見て、それを放っておけない、あわれみをもって接しようとするのです。なぜなら、神が同じように自分にあわれみをもって接してくれたから。神は私の霊的貧困を見て、罪を見て、さばき与えられるその無残な結果を知ってあわれみの心を閉ざされなかったのです。神はその御手を差し伸べてその人の罪の身代わりとなって死んでくださった救い主を与えられたのです。それを知っているゆえに、天国に属する人は苦しみの中にいる人に対して、あわれみの心を閉ざさないのです。これらのことばは、これを聞いていたユダヤ人にとって非常にショッキングな内容でした。

6番目にイエスが語るこの8節のみことばも大きく変わりはありません。「**心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。**」、イエスはここでも私たちに天国に属する者の特徴を教えてください。このことによって、私たちは自分が本当に天国民であるかどうかを測ることができるのです。そのために、私たちは細かく見て行かなければなりません。いつもと同じように、二つの事柄を通して見て行きましょう。一つは、天国に属する者の特徴が何であるのか、そして、もう一つは、そのような幸いにあずかる原因は何かということです。イエスは言われます。

### 1) 心のきよさが天国に属する者の特徴である

「心のきよさ」というのはイスラエルの民にとって全く知らないことではありませんでした。旧約聖書にそのことは教えられていました。しかし、実際の生活の中にそのような姿を見ることができたかという、それはまた別のことです。この当時生きていたユダヤ人、特に霊的リーダーと言われていたパリサイ人や律法学者たちの中にそのような生活を見出すことは不可能でした。彼らが求めていたのは律法を外面的に守ることだったのです。彼らは義の姿をすることが大切だと考えました。それゆえに、見せ掛けだけでも正しければ内側はどうであっても構わないという思いをもっていました。この当時の人々は、一体どうすれば律法を破らないで生きることができるのかということを実際に考え、そのことに熱心でした。そして、それさえできれば自分は正しい者であると、そのように確信していたのです。その人たちにイエスはこのように言われました。マタイ23：25-28「**恐ろしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。：26 目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。：27 恐ろしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいなように、：28 あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。」と、このようにイエスのことばを見たとき、私たちははっきり分かります。神が関心をもっておられるのは、外側がどれだけ素晴らしいかではなかったのです。外面的にどれほど立派な人物であるかと言うことは、神にとってそれほど重要ではなかったのです。何が重要だったのでしょうか？内側です。本当の信徒、本当の天国民の姿を私たちが知ろうとするなら、それは外側に見える行動ではなく、内側にあるその人の態度によって測ることができるのです。そのことをよく理解した上で、イエスのことばを細かく見て行きましょう。**

イエスは「**心のきよい者は幸いです。**」と言われました。幸いな者の特徴は「心のきよさ」でした。まず、この特徴を考えるに当たって、「きよい」とはどういう意味なのか考えて見ましょう。皆さん、心がきよいと言われたら何を想像されますか？ここでイエスが使われている「きよい」ということばは、一般的に肉体的、儀式的、道徳的なきよさを表わすことばとして用いられています。汚れがない、汚染されていない、そのような意味があります。ですから、聖書の中ではよく「きよい水」とか「きよいいけにえ」と表現します。それは、何か間違ったもの、汚いものによって汚染されていない、汚されていない状態

を指しているのです。この「きよい」ということばを見て行くとき、非常に興味深いと思ったことは、黙示録の最後に「新しいエルサレム」の姿をヨハネが記している箇所があります。その中で新しいエルサレムの道が何でできているのか、皆さんご存じですか？ガラスのように透き通った金でできているのです。その金はどのようにガラスのように透き通っているのかというと、それは余りにもきよいからです。黙示録 21：21「また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。」、それがどのようなものか分かりません。なぜなら、この地上にはガラスのように透き通った金というのはいないからです。ですから、天国に行ったらぜひそれを見てみたいと思います。金が余りにも純粋であるゆえに、不純なものが全く含まれていないゆえに、まるで透き通っているように見えるというのです。これがこの「きよい」ということばが一般的に使われているときの意味です。

けれども、イエスがここで言っていることばは、単にきよい、汚染されていない、汚れがないということ、それだけを言っているのではなく、もう少し深いことを話そうとされているようです。多くの注解者、また学者たちは、この文脈の中でのこのことばに「きよい」という意味に加えて、もう一つの意味を見い出します。そのことを説明するに当たって、神が私たちに与えてくださったこの山上の説教の注解書を見てみたいと思います。それはヤコブの手紙です。ヤコブの手紙にはこの山上の説教で教えられていることがたくさん記されています。ヤコブはその解説をしてくれています。その中にこのようなところがあります。ヤコブ 4：8「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。」、この箇所は非常に多くのことを語ることができる深い真理が記されている箇所ですが、今日、皆さんと注目したいのは最後のことばです。ヤコブは言います、「二心の人たち」、どうするのでしょうか？「心を清くしなさい」と。ここで使われている「清くしなさい」という動詞と、イエスがマタイ 5：8で言われた「心のきよい…」という「きよい」は同じことばです。動詞であるか名詞であるかの違いだけです。ヤコブはここで言っているのは「二心の人たち」、つまり、心が分かれている人です。その人たちは心をきよめなければいけないのです。逆を考えて見ましょう。心をきよめなくてもいい人はどんな人でしょう？心が二つに分かれていない人です。先ほど、詩篇 24篇を読みました。その 3-5節は、実はこの至福の教えの基になっている箇所であると言われます。4節を見ると「手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。」とあり、ヤコブが言っていることとほとんど変わりません。心がきよらかな者は、そのたましいをむなしいことに向けないのです。心が二つに分かれることがないのです。この人は一つの心をもって生きているのです。たとえば、「純粋な動機をもってこの人はこれをしました」と言ったとき、皆さんはどのようにそのことばを捉えますか？他のことを考えないでそれをしたのです、何か他に目的があったのではないのです。一つのことを思ってそれをしたのです。心に汚れがないゆえに、一つのことに向いている人のことをイエスは言っているのです。一つの事柄に専心している人、ある注解者はこのように言います。「神の王国とその義とを一心にそれに献身している人物は、内面的にきよい人物である。内側の偽り、見せ掛け、道徳的な汚れはキリストに対する熱心な献身と同居することはできない。」、もし、私たちが神に熱心であるなら、そこには汚れを見ることはできない、逆を言えば、もし、私たちの内側がきよめられ、汚れのないものになっているなら、そこには心が分かれることは有り得ないということです。それゆえに、私たちはこの「心のきよい」ということばを見ると、単に、汚れから遠ざかっている、汚染されていないきよいものと考えただけでなく、同時に、それゆえに、神に対して一意専心しているそのような姿を見い出すべきです。きよめられ汚れがないゆえに、一つの事柄を熱心に追い求めるものである…。

けれども、よく考えなければなりません。何がきよめられていないといけないのでしょうか？何に専心していないといけないのでしょうか？パリサイ人や律法学者たちも一つのことに専心していました。彼らは一生懸命外面的な義を追い求めたのです。それさえ手に入れるなら私は正しくなると考えたのです。それさえあれば私は天の御国に入ることができると考えたのです。彼らも一意専心していたのです。イエスはそんな彼らのことを誉めたのでしょうか？彼らが幸いだと言われたのでしょうか？そんなことはありません。では、一体何がきよめられていなければいけないのか、何に専心すべきなのか、イエスはそれは「心」だと言われます。「心」ということばを見ると、私たちは感情的な事柄を思うかもしれません。現代に生きる私たちは、心が感情と直結しているかのように考えてしまうからです。けれども、聖書がこのことばを使うときに、私たちはそのような思いを取り除かなければいけません。なぜなら、聖書は心が私たちの人格の中心であると捉えるからです。この心は感情を司るだけでなく、私たちの思考、意志を司る場所なのです。その人の本質、その人自身と言っても過言でないでしょう。ミッション・コントロールセンターということばを聞かれたことがありますか？たとえば、スペースシャトルが打ち上げられます。その動き全部を知って指示しているのはどこですか？宇宙船の中？違います。地上にあ

るナサの基地です。司令室があるのです。そこで今回はこういう航路でこういう速度でこういう働きをしなさいと、全部命令するのです。それに基づいて宇宙船の中にいる人たちは行動するのです。私たちの心は私たちの人生のミッション・コントロールセンターです。司令室なのです。イエスがここで「**心のきよい者**」と言ったとき、イエスが言われるのはあなたの感情がきよいというのではなく、あなたのすべてがきよくなければならない、あなたを支配する「心」からきよくなって行かなければいけないと。イエスは天国民のうちに心から始まるきよさを見い出していたのです。別の言い方をすれば、先ほどから何度も言うように、私たちが何をするかということは神の前に余り大きな問題ではないのです。私たちの心がどうであるかということに比べると…。私たちはたくさん良いことをすることができます、悪い動機で。こういう良いことをするならこういう見返りがやって来るから、私はこの良いことをしましょう、神はそれを喜ばれるでしょうか？私たちはそのような態度で行動を取ることがあります。けれども、神が求めておられるのは心のきよさだったのです。

イエスはここで決して新しい啓示をしているわけではありません。これまで神が語られてきた古い教えをもう一度繰り返しているだけです。皆さん、神はなぜノアの時代に洪水を送ったのか、その理由をご存じですか？創世記の6章に記されています。6：5「**主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。**」、これが理由で神は人の生存期間を定めるのです。「**心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾く**」と、心のことが言われています。この当時生きていた人たちは皆、いつもその心が悪へと傾倒していたのです。神が見ておられたのは行動ではありません。悪い事柄に傾く心をもってゆえに、人々は悪い行ないを繰り返しました。それゆえに、神はその心の悪さのゆえに人々をさばかれたのです。箴言の中でソロモンは私たちにこのようなことを教えています。4：23「**力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。**」、何を見守るのでしょうか？心です。なぜなら、あなたのいのちはここから出て来るからです。神はこのようにモーセを通してイスラエルの民に求めました。申命記6：5－6「**心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。：6 私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。**」、神は何を求めておられるのでしょうか？私たちが私たちの全存在をもって神を愛することです。彼らはそれを「心」に刻んでおかなければいけなかったのです。そこにしっかりこのことが書かれているなら、彼らが行なう行動には「神を愛し神に従う」ことが生まれて来るのです。同じ申命記10：16で神は言われます。「**あなたがたは、心の包皮を切り捨てなさい。もうなじのこわい者であってはならない。**」、心に割礼を施しなさいと、肉体の割礼が大切ではないのです。それはあくまで印でしかありません。神が求めておられるのは、私たちの心が罪と決別していることです。それゆえに、神の方だけをしっかりと向いて私たちのすべてをもって神を愛し従って行く生き方です。私たちの心が私たちの人生の司令塔であることを覚えておかなければいけません。そこにきよさがなければ私たちがどのような行動を取っても全く意味がありません。イエスが語ることばを見てください。マタイ15：17－20「**口にはいる物はみな、腹にはいり、かわやに捨てられることを知らないのですか。：18 しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。：19 悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。：20 これらは、人を汚すものです。しかし、洗わない手で食べることは人を汚しません。**」、何が人を汚すのでしょうか？私たちの心にあるものです。私たちの心がきよくなければ私たちの行ないは汚れたものなのです。イエスがここで語っておられることばは、今私たちが見ているこのマタイ5：8と非常に深い関連があると思います。なぜなら、イエスはこのことばをユダヤ人のリーダーたちとのやりとりの中で語られたのです。15章の1節から簡単に追って行くとこのことが分かります。ユダヤ人のリーダーたちはイエスのところにやって来ました。そして、言うのです。「**なぜ、あなたの弟子たちは手を洗わないで食事をするのですか？**」と。なぜ、こんな質問をしたのでしょうか？それは、不衛生ですよということではありません。儀式的なきよさのことです。汚れたものに触れたまま食事をとると、その汚れがその人のからだに入っていくって、その人を汚れたものにするって彼らは考えたのです。だから、食事をする前に特に何か汚れたものに触れるようなことがあるなら、その人はしっかりときよい水で手を洗って身を清めてから食事をしななければいけないと彼らは言っていたのです。それに対して、イエスは彼らの「**どうしてですか？**」という質問には全く答えられません。代わりに、あなたたちは「**自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしまいました。**」と6節で言われています。そして、8－9節ではイザヤ書に記されていることばを引用して「**『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。：9 彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』**」と言われました。人々は外面的なきよさを守ることが大切だと思っていました。イエスは内面的なきよさがなければ何の意味もないと言われたのです。

マタイ5：8でイエスが語ったことは、私たちに深い関わりがあるのです。心のきよさを私たちがもっているかどうかは非常に重要な問題です。私たちが外面的に何か良い行ないをしているから私は立派

なクリスチャンですとするとするならば、あなたはパリサイ人と同じことをしているのです。皆さんが考えなければいけないことは、皆さんの内面がどうであるか、心が本当にきよいものとなり、きよいがゆえに神のみを見て生きているかどうかです。山上の説教は非常にすばらしいメッセージです。その序論として至福の教えがされていると言いました。実は、特にこの5：8のことばの意味はこの説教の中で繰り返されるのです。どこで繰り返されているのでしょうか？あなたの心はきよくなければいけない、そのきよさというのは汚れがないゆえに、神以外のものを見ようとしない心であると、マタイ6：33で「**だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。**」とされています。天の御国に属する人は何に関心をもって生きるのでしょうか？神の国と神の義です。その人たちは神から目を離さないのです。なぜなら、心がきよくなっているからです。ちなみに、この6：33のことばはどのような文脈で語られたのか、イエスは言われました。心配してはいけません、なぜなら、神が心配してくださっているでしょう、神があなたのことを面倒見てくださっているでしょう？と。空の鳥を見なさい、野の花を見なさい、神があんなに小さなものにもあのように良くしてくださる、ましてや、あなたたちに良くしてくださらないはずがないでしょう、だから、神のことだけを見て行きなさいと。これは25節から始まるのですが、この6：25の最初に「だから」とあります。こういう意味なので、それゆえに、と訳されることばですが、前のところから続いて来ているということを示します。ですから、「心配するな」ということばは山上の説教の中で独立して出てくることばではなく、その前のところに係っているのです。19－24節までのセッションは私たちが一意専心していなければいけないということをお話しています。その最も分かり易いことばがこの24節です。「**だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。**」、一人の主人に仕えなければいけない、一人の方を見続けなければいけない、一つのことに専心して生きなければいけないと言います。そして、「そういうわけで…心配してはいけません」と続くのです。

あなたは「私は二人の主人に仕えていません、神さま第一です、私は富になど仕えませんが、人の目を気にして生きることもしません」と言われるかもしれません。でも、もし皆さんが心配して生きておられたら、皆さんの心は分かれています。神が皆さんの必要を完全に満たしてくださるということに信頼を置くことができないがゆえに、皆さんの心は分かれるのです。どうすれば、私の必要を満たすことができるのだろうか？と。しかし、天国に属する人はそのような生き方はしないとイエスは言われます。彼らは一意専心します。一つのことに目を留めて生きるのです。100%神を見上げて100%神に仕えようとして生きるのです。神の国と神の義とを第一として生きるのです。他に気にすることはありません。

では、いったい私たちの心はどのようにしてきよくなることができるのでしょうか？大切な質問です。答えは皆さんがよくご存じです。ここにおられるほとんどの皆さんはもうすでに天国に属しているからです。私たちの心は、エデンの園でアダムとエバが神に逆らったときからずっと汚れたままです。どれだけ私たちが努力してもそれできよくなることはありません。私たちの心は余りにも悪に満ちていて、私たちはこの心に思うことは悪いことばかりなのです。いったい、どのようにしてこの心をきよめることができるのでしょうか？ダビデはこのように祈りました。詩篇51：10「**神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。**」、神がきよい心を造って私に与えてくださるのです。どのようにしてそれをしてくださるのでしょうか？非常に重要な質問です。パウロに答えてもらいましょう？使徒の働き15：8－9にこのようにあります。「**そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、9 私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。**」、神が人々の心を信仰によってきよめてくださったのです。イエスはヨハネ15：3で「**あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。**」と言われました。私たちの心がきよめられるに当たって私たちに必要なのは、イエス・キリストの贖いの血です。イエス・キリストによる赦しです。私たちはこのイエス・キリストのみことばとそのみわざを通して、神によって私たちの心は変えられるのです。私たちの心がきよいのは私たちが何かすばらしいことをしたからではありません。一生懸命私たちが心の洗濯をしたからではありません。私たちの心に染み付いたシミはどれだけ強力な漂白剤を使っても白くならないのです。唯一、それをきよめることができるのは、イエス・キリストがなしてくださったみわざです。そのようにしてきよめられた心をもっているのが天国に属する者だと言います。そして、このようなきよい心を持った者は神への完全な献身をもって生きるのです。それが天国民です。このようなきよさ、このような献身在皆さんの人生を特徴付けているのでしょうか？確かに、私たちは完全ではないと理解しながらも、皆さんはこのきよさに向かって一生懸命生きようとされていますか？皆さんは自分の人生を100%主のために生きようとされているのでしょうか？私がこれをするのは神に喜んでほしいから、神のすばらしさが現われるた

めに私はこの人生を捧げたいと心から願っていますか？皆さんが外面的にどれだけ素晴らしい働きをされていても、もし、その心の態度がきよく神に献身したものでなければ、皆さんの心を探られる神は皆さんの人生を決して喜ばれません。皆さんがたとえどれだけ情熱をもって何かをされたとしても、もし皆さんが完全に神と神の栄光に献身していなければ、皆さんの礼拝を神は喜ばれません。そのような特徴を皆さんはもっておられますか？それが天国民だと言います。

## 2) なぜ、この人は幸いと言えるのか？

真の天国民がもっている特徴、それは心のきよさでした。では、いったいなぜこの人は幸いなのでしょう？イエスは言われます「この人は神を見るからです」と。原因はここにあるのです。時代劇を想像してください。皆さんが町の人だったとします。将軍にどれだけ会うことができるでしょう？ほとんどないでしょう。何か良いことをして褒美に謁見することがあるかもしれません。でも、それは人生一度あればいい方でしょう。イエスが言われるのは、あなたは、天国に属する人は、王の王であるこの御国の主といっしょに、同じ部屋の中で、その方を自分の目で見続けて生きることができるということです。そこには近い関係があります。そこには親しい交わりがあります。そんな祝福が与えられているのです。それがどんなに喜ばしいことが気付かれますか？このことの説明のためにはこの箇所しか思い浮かびません。黙示録 21:3-4 **「そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」**、神がともにいてくださると言うのです。繰り返し繰り返しヨハネはくどいほどそのことを告げます。そして、それゆえに、苦しみも悲しみも病も死も何もなく、完全な喜びと完全な満足があるのです。天の御国に属する者は王の王である方、私たちに完全な喜びと完全な満足をもたらすことができる方と、永遠に継続的に親しい交わりを持ち続けながら生きることができるのです。幸いだと思いませんか？私たちが幸福感を感じる時、何か自分に満足しているとき、良い状況にあってああよかったと思う、それが永遠に続くと思ってください。幸せです。

ちなみに皆さん、今、目の前に神を見たとして、神の栄光の前に立ったとして、何か他に見たいものがありますか？神以外に何も見たくないはずです。その神の栄光をもっともっと見せてください、もっと味わわせてくださいと思うのが私たちです。そこに私たちの本当の満足があるから、本当の幸せがあるから、そして、それが約束されているのが天国民なのです。だから、天国民はどこを見て生きのでしょうか？この世の宝ですか？名声ですか？地位ですか？幸福な家族関係ですか？円満な人間関係？苦勞のない生活？違います。だから、天国民はこの地上においても神を見て生きるので。そこから目を離さないのです。皆さんはそのような生活をされていますか？皆さんには天国が約束されています。神との永遠の交わり、完全な満足を与えることができる神は、あなたに満足を保証しておられます。神は皆さんの心を恵みによってきよめてくださるのです。ゆえに、皆さんは天の御国において神を見続ける特権を与えられるようになったのです。神が皆さんの心をきよめてくださったがゆえに、私たちは今、心のきよい者という特権をもって生きることができるのです。そして、皆さんがもし、心のきよい者という特権もっているなら、どのような生活が待っているのでしょうか？心は私たちの司令塔となり、そのきよい心は私たちの行ないにきよさをもたらすのです。パリサイ人は間違っていました。外面的なきよさが自分たちを天国に入れると思っていたからです。外面的なきよさは私たちを天国に入れません。内面的なきよさが問題だからです。

皆さん、幸せですか？皆さんは0から10点までで点数を付けるとするなら、皆さんの幸福度は何点を付けるでしょう？皆さんは私たちがもっている神との関係のゆえに、私は幸福であると言えるでしょうか？皆さんの心は皆さんを救ってくださった神に対する排他的な献身をもっているのでしょうか？皆さんの心はそれゆえに神に仕える、神のために生きる、その喜びで満たされておられますか？それとも、皆さんは他のところを見ておられませんか？他のことで自分の満足や喜びを見い出そうとされていないでしょうか？皆さんは私が幸せでないのはこれこれが足りないからとっていないでしょうか？あれさえあれば私はもっと幸福になれるのにと考えていないでしょうか？皆さんの心は二つに分かれていないでしょうか？もし今朝、私は幸福でないと答えるならよく考えてください。注意深く、神を見ることができるという約束が私にとって現実のものであるかどうかを考えてください。自らの信仰を吟味し、皆さんの信仰に、救いに確信をもってください。もし、そこに確信をもてるなら、心をよく探り、神以外の場所に幸福を求めているかどうかを考えてください。皆さんがどう思おうと、皆さんが救いをもっているなら、イエスは言われます、「あなたは幸福だ」と。

この山上の説教の至福の教えを話し始めて、今回で7回目になります。タイトルは「幸福に降服する」としてありますが、これはくだらない冗談ではなくちゃんと意味があります。皆さんは自分が持っている現実をご存じですか？皆さんには幸福が与えられているのです。ところが、私たちはその与えられてい

る幸福に対して戦いを挑むのです。私はこれでは幸福でない！と。もっとこれが必要だ、あれも必要だ、あれがあったら幸せなのに…と。神は幸福だと言われているのに、私は違うと言い張るのです。皆さんが気付かなければいけないのは、神が与えてくださっている幸福に降服することです。なぜなら、皆さんは天国民だから、皆さんは心のきよさを与えられているからです。